

平成24年6月5日発行(毎月5日1回発行)  
第52巻6月号(通巻405号)

# 風土



6

警策の音

神蔵

器

老鶯や右へ曲がれば虚子に会ふ

滴りをぐぐりて一步墓前かな

一木ぼくの観音菩薩牡丹咲く

尼寺に蓮甕いくつ夢うつつ

たかななや聖者のごとく熱かりき

鎌倉や魚のまなこに虹のたつ

漱石に警策の音涼しかり

カタカナの三下り半や梅は実に

傘雨忌や鎌倉に日を落したり

まつすぐな参道消して春満月

建長寺  
二句

牡丹咲く釈迦苦行像鬚伸びて

柏楨の緑陰に時流れをり



# 竹間集

同人作品



吉野梅郷行

田村すゝむ

水に添ひ来て梅林に突き当る  
お茶を待つ床几番ひのさくら餅  
涅槃西風未完の詩を持ち歩く  
岩割岩割の梅つて梅の香りを空に撒く  
梅の香を添へ二夕尋の長屋門  
吉川英治記念館  
梅冷えや英治遺愛の将棋駒  
梅咲いて英治の山河隠れなし

わが息の

瀬戸

悠

榛の木に水音こもる西行忌  
梅園や梅見の滝を設へて  
墨で描く釈迦三尊や鱈東風  
差し交はす紅梅白梅いのちなが寿  
春泥の一本道を檀那寺へ  
鍵盤に歳月の染み春深し  
わが息のわが身に通ふ花の冷え

四月馬鹿

塩田

博久

花粉症マスクを冬のものにせず  
美容院行くに化粧や四月馬鹿  
校正に眼玉の乾く万愚節  
何も無き春週末を憎みけり  
懐中に献体証や鳥曇  
留守の庭木の芽一斉蜂起せる  
ぶらんこにセールスマンの昼餉かな

陽 炎

代田 青鳥

陽炎や人消してゆく坂の上  
高台のナース宿舎や囀れり  
独り言多くなりたる入彼岸  
摘草の匂ひ袋となりにけり  
春風や睫毛の長き男の子  
大川を一本通し山を焼く  
三月の碧き海底水族館

朧

田中佐知子

雪の間の水のきらめき座禅草  
波の音大涅槃図のうしろより  
涅槃西風波止に乾きし囀籠  
鱗築上へ上へと涅槃かな  
川底に透ける鱗の影濃かり  
舞鶴は子らのふるさと鱗どき  
橋立の松の香のたつ朧かな

夢

工藤ミネ子

小雪崩を斜面にとどむ風倒木  
すこやかに老いぬ手を取る雪の坂  
一羽とは重きみ空の鵝かな  
雪を割るだけの鉞町住ひ  
山一つ夕日敷きつめ雪のひま  
すれちがふ貨車のリズムや鳥雲に  
春雪や目覚めて夢のみな忘る

花 衣

柴田 久子

げんげ田に積木のやうな家の建つ  
さかしまに川面を歩く花衣  
水音は闇より出でて開帳寺  
山頂のふくらんでくる鳥の恋  
覗き見る駅の鏡や風光る  
雨降れば雨の気品のさくらかな  
永き日や鉛筆にある木の匂ひ

## 蛇綱の邑

### —大竹淑子—

とりよるふ寒の雪嶺蛇綱の邑  
日輪を隠す冬霧蛇綱村  
蛇綱村猪を見張りの小屋設け  
ぬめる田の土に蛇綱を待つ焚火  
焚火の焰村に蛇綱の衆老いぬ  
白菜の檻樓まとひしごとき畑  
先達の習ふ法螺の音寒日和  
脇差しを呑んで蛇綱や寒土用  
担がれて蛇綱全長冴ゆるなり  
蛇綱の眼笑ふ赤子の頭をかみて

蛇綱（じゃづな）

宮津駅から福知川方面  
に向かつて（中略）車で  
約十分、左へ入って約百  
メートルのところに荒木  
神社、その山手に戸数  
三十余の今福集落があ  
る。集落では毎年一月  
十九日、村民が藁縄を  
纏って作った約六メート  
ルの大蛇（蛇綱）を担い  
で村内を巡るという行事  
がある。蛇綱の蛇に咬ま  
れると無病息災で過させ  
ると言われ、付内を巡っ  
た蛇綱はやがて荒木神社  
の銀杏の木に巻きつけら  
れ行事は終わる。巻きつ  
いて睨みを利かす蛇綱は  
ユーモラスである。  
〔若丹吟行案内〕より）

# 山河集

同人作品



## 神蔵器選

三月の坂東太郎に音生まれ  
桜餅並びてふたつ夫の買ふ  
ふたありに雛飾らぬひなの日  
かげろふや人を集めて出る渡し  
繭の木に春禽の尾の見え隠れ

上村葉子はこ

春きざすけふ大いなる岩手山  
かまくらに小さき手小さき餅を焼く

十井ゆう子

余寒なほ黒塀つづく武家屋敷  
人形店出で春雪に傘開く  
節分や兄の忌日に嫂とゐて

生田恵美子

買ひ置ききの切手減りゆく鳥雲に  
百年の梁を戴く雛の土間  
漣に言葉残して鴨引けり

鳥雲に濡れて鉄路の続きをり  
花種蒔く擦つて指紋のなめらかに

直井たつろ

存分に息吸ひて吐く春野かな  
木洩れ日の様な幸せすみれ草  
末裔の生き様知らず大石忌  
春一番千畳閣を吹き抜けて  
車椅子混じる一団曾我の梅

小林和子

春光を経糸にきぬ織る明りとり  
湖底に村在りしむかしの土筆摘む  
雀の子残らず立ちて地震の屋根  
ぎくぎくと秒針刻み二月逝く  
山吹や木曾路十一宿場町

◇特別作品◇(抄)

## 白馬行

林いづみ

雪となる春のみぞれの白馬村  
浅春の八方尾根に雪五尺  
堅雪に黄砂のまじりをりにけり  
膝丈の紅き長靴冴返る  
雪解川日本海へと逸るなり  
あるかなしの雪間を埋む今日の雪  
露味噌にすすむ一献ありにけり  
水音をしとねにしたる座禅草  
おぼろ月山毛櫨の林に移りけり  
木の芽風アルプス連峰一望す

# 風土独語／神蔵器



竜天に皇后陛下下の糸箆筒 林 いづみ

宮内庁三の丸尚蔵館の皇后陛下喜寿記念特別展での作である。主な展示品は御養蚕飼育の繭四種。糸箆筒と御養蚕所の生糸。「御養蚕始の儀」で御使用のカルトンの羽箆、儀式等の際に飾られる牙彫「藁苞に繭」、御養蚕所でご使用の蚕座「藁簇等の養蚕用具、御養蚕所の繭を使って作られたブローチなどである。

これ等のうち特に注目されたのは、皇后さまが古稀の御祝いに天皇陛下から贈られた糸箆筒である。中は拝見することは出来なかったそうであるが、御養蚕所飼育の繭四種繭（小石丸・白糸・黄糸、天蚕）、それぞれの生糸、また何十種類もの色別にした刺繡糸、金糸、駒糸などが収められているという。

さて、問題は「竜天に」という季語である。一般に俳句を作るということは「物に入りて、その微の顕れて情感するや句と成る」（三冊子）のとおりであるが、「情感する」と「句に成る」の間には表現、つまり感動や感激を文字に置きかえる表現がある。これは必須の条件である。得た感動がそのまま文字に成る場合も勿論あるが、感動は大きければ大きいほど、どうしたら正しく表現出来るか悩むものである。

皇后陛下下の糸箆筒の、その中には皇后さま自らお育ての日本純

産種の蚕である「小石丸」など、正倉院宝物の復元や貴重な文化財の修理などに用いられた繊細で美しい絹糸などがあり、また天蚕など一般には絶滅したのではないかと思っていた品種もある。

昭憲皇后が始められて以来、貞明皇后、香淳皇后、そして皇后さまへと引き継がれて来た宮中のご養蚕に、平成の御代・奈良期の古代製の復元という新たな道も開かれた。

作者の写生と主観に「竜天に登る」という季語を得て、自らが感得した感動を表現し得た。見事である。

三月の坂東太郎に音生れ 上村 葉子

三月というと龍太先生の代表句

いきいきと三月生る雲の奥 龍太

をすぐ思い出される。この句は二月が終つていよいよ三月、鳥も歌い、草木も萌え、空には明るく真つ白い雲がぼつかりと浮んでいる。その白い雲の奥にいきいきと三月の到来を感じとっている。

葉子さんの句は眼前直覚である。流石は日本最大の利根川、群馬県北部の上流の山々はなお厚い雪に閉ざされたままであるが、源流に近い川沿いの雪は、幾日か暖かい日を得て雪解が始まっているのである。水嵩も増し、やや濁り、水音も急に高くなった。

この一年、日本列島は東北の大震災をはじめ、かつて無い天災人災の異常な年であった。しかし、自然は決してどんな災害にも負けないで堂々と生きている。「音生れ」はまさに命の讃歌である。作者も勇気づけられ、はげまされ、心を躍らせている。（以下略）

# 風土集



# 神蔵器選

竜天に皇后陛下の糸箆筒 東京 林いづみ

三百の文書き終へて野に遊ぶ

つくしんぼ鉄路に音の伝はり来

方丈に円相の窓木木芽吹く

野仏のすみれの中におはすなり

畦焼いて未明の色の淡海かな 高槻

たばしれる比叡の水や春田打つ 浅田 光代

バンドナを巻いて湖国の田を打てり

鎌音の近江や露はしうとめに

畦とんで土筆の国へ入りにけり

通学路歌ふがごとく土筆伸ぶ 横浜 安永 圭子

また一つ栗鼠吸ひ落とす藪椿

夫亡くて貝母の花をいとほしむ

かがまりて網笠百合に声掛くる

露の花誰も知らずに一人立ち

蛇出でて黒書院より白書院 福井 池田 光子

近づけば芯のくれなる桜の芽

朧へと寝台特急京都発つ

夕ぐれて地べたになじむ前木市

春の水跳ねて糸魚いとよの光なす

大塚書館 三句

ブルデルのベートーヴェン像や春一番 京都 杉本葉子

春風やエルグレゴてふ珈琲館

春愁やモディリアーニの目の中に

三寒の 四温の中の美術館

片羽根を広げて鷺の花を待つ

振り向かぬ別れもありぬ陽炎へる 川崎 直井たつろ

藍瓶の藍の目に染む弥生かな

棕櫚繩の手応へ垣を繕ひぬ

三月の雪降つてゐる川の上